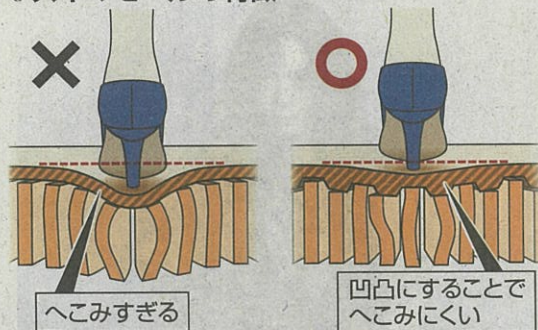


◆スキマモールの特徴



車両との隙間を埋める「スキマモール」を取り付けたホーム(大阪府池田市の阪急・石橋阪大前駅で) 東直哉撮影

電車とホーム 隙間を守る

阪急電鉄社員の家族の体験をきっかけに誕生した、電車のホームの端に取り付け車両との隙間を埋める部品「スキマモール」が鉄道各社の安全対策に貢献している。東京五輪・パラリンピックに向けて駅のバリアフリー化が進む中、全国200以上の駅で採用されている。

スキマモールは、阪急と合成樹脂メーカー「クリヤマ」(大阪市)が共同開発した部品。ホームの線路側の端に張り出すように取り付け、車体との隙間をなくす。隙間はホームがカーブ

転落防止部品 全国200駅以上採用

阪急社員 次男の経験基に発案

◆導入している 主な鉄道事業者

- JR東日本
- 多摩都市モノレール
- 阪急電鉄
- 近畿日本鉄道
- JR九州
- 沖縄都市モノレール

している駅にできやすく、広い所では20センチ以上という駅もあるが、部品で調節することで、転落事故を防げ、車いすでの乗降もスムーズになる。

開発を提案したのは阪急社員の嶋津祐司さん(48)。2011年、幼稚園児だった次男が、別

の鉄道会社の駅で、ホームと車両の隙間に足がはまって転落しかけ、対策の必要性を社内で訴えた。

隙間対策は古くから鉄道各社の課題だったが、解決が難しかった。取り付ける部品は、車体が揺れて触れても傷つけない軟らかさと、人が踏んでも、へこんでバランスを崩さないだけの硬さが必要だからだ。

そこで嶋津さんらは合成樹脂の素材をくし状にし、その上に板状のパーツを設置。さらに天板に凹凸を作り、横からの圧力には変形しやすく、上からの圧力に十分な強度を実現した。

13年7月に完成し、「隙間を守る」という意味で、嶋津さんが「スキマモール」と命名。関西では阪急の17駅を含め、40駅以上で導入されている。

普及の後押しになったのは東京五輪だ。国土交通省が19年8月、車いす利用者が介助なしで車両に乗れるように「車両とホームの段差3センチ、隙間7センチ」という目安を作り、対策を求めた。首都圏では、JR東日本が今年3月までに山手線や中央線など65駅に設置しており、車いす利用者から「大変便利になった」と好評という。

3月現在、全国32の鉄道事業者が計約230の駅に導入し、嶋津さんは「たくさんの方の乗客の安全につながっているのは、うれしいですね」と話している。

